

# トライアングル

2005年

第2号

平成17年9月発行 通巻第6号

「農業者・地域住民」、「地元関係機関」、「行政」の連携による農村活性化を目指して

宮城県古川地方振興事務所 農業農村整備部

## 特集 大崎地域の土地改良事業地区営農推進優良事例団体の近況報告

- 平成5(1993)年受賞 小島生産協業組合(現 有限会社イーストファームみやぎ)  
平成13(2001)年受賞 JA アグリ高倉  
平成14(2002)年受賞 アスファ生産組合  
平成15(2003)年受賞 佐野サングリーンファーム

### 土地改良事業地区営農推進優良事例とは

国営及び県営の土地改良事業地区における営農推進の優良な事例を対象として、平成5年度から実施しているものです。関係団体及び農家を表彰することによりその成果を農業関係者に広く普及し、土地改良事業地区の営農の円滑な定着・発展を図ることを目的としています。

事業により整備された水田等の農業生産基盤を有効に活用し、農産物の生産販売や生産組織・後継者の育成等に創意工夫を凝らして積極的に取り組むことにより農家経営の安定化を図っている「先進的な事例」を表彰の対象としています。

## 小島生産協業組合(現 有限会社イーストファームみやぎ) 「生産中心の組合から、加工販売中心の企業体へ」

### 営農状況・活動状況の変化

生産のみではなく加工販売も目指して平成6年3月に小島生産協業組合を発展的に解消し、(有)イーストファームみやぎが設立されました。法人設立にあたって、従来の生産中心の経営から生産・加工・販売に至る経営形態に変えています。「友達感覚」の組合ではなく、経理・製品管理・顧客管理にコンピュータを導入した販売中心の企業体へ転換したものです。



従業員の皆さん

平成6年9月に加工センターが完成し、もち加工事業へと経営を展開しています。翌年3月には宮城県農産加工品コンクール(餅部門)で最優秀賞とデザイン賞を受けました。

その後 新加工施設(米の低温倉庫や精米プラント)が完成し、より品質の高い商品を提

供できるように努力を重ねています。

今後の取り組みに関する展望・課題等

「生産者の顔の見える販売」に力を入れる取り組みを目指して南郷町農産物直売所「花野果市場」やJAみどりの各支店の「元気くん市場」に常時出荷しています。

今年7月9日にはJR池袋駅東口前にオープンした宮城県のアンテナショップ「宮城ふるさとプラザ(コ・コ・みやぎ)」に常設コーナーが設けられましたので、今後は首都圏での販路拡大が期待できます。

また、全国の消費者との年間契約件数が現在200件ほどになっているので、今後はこのような契約栽培を増やして販売の中核とする構想があります。

本社所在地である南郷町二郷字前谷地付近の水田は明治・大正期に10アール区画に整備されていますが、農道が狭く水路が未整備であり、大雨時には冠水することも多い場所です。営農条件の解消のため、平成21年度の完成を目指してほ場整備事業(担い手育成型)蛇沼向地区が進行中です。完成後、さらなる規模拡大が期待できます。



アンテナショップ「コ・コ・みやぎ」前で

## JA アグリ高倉

### 「基本に忠実であれば いいものができる」

営農状況・活動状況の変化

地域では、3年周期のブロックローテーション体制を確立させています。

平成13年度と15年度に、ふるかわ大豆栽培共励会の「大豆十ヘクタール以上の生産集団」の部門で「最優秀賞」を受賞し、地域を代表する営農集団となりました。

請け負った水田あぜの草刈りを行うなど、集落の理解を得るように日々努力していますので、集落住民から有力な雇用先として認められつつあります。

営農状況の特徴としては、大豆の防除を効果的に行うため自重100kg程度のラジコンヘリコプターを使用しています。比較的大きなラジヘリを使うことにより大豆の葉の裏まで薬剤が散布されるようになりました。

今後の取り組みに関する展望・課題等

現在は構成員が個別に地域の水稲作業を受託しています。利用権設定による賃借面積も徐々に増加してきました。

後継者対策を考えると、法人化も視野



ブロックローテーションを説明する組合長



ラジコンヘリコプター

に入れた企業的な農業経営を確立させたいと展望しています。

将来的には「水稲＋麦・大豆」を中心とした土地利用型の複合経営をさらに大きく発展させ「共同出資の集落型経営体を設立したい」と組合長は考えていますが、水稲単作地区のため個別経営を志向する農家が多いのが現実です。



1 ha 区画の大豆ほ場

## アスファ生産組合

### 「ほ場整備が実現した 農業に懸ける七人の“夢”」

営農状況・活動状況の変化

受賞時の経営面積は 4.3ha でしたが、現在は 5.3ha となり、生産が拡大しています。とくに J A の奨励もあり「仙台小ねぎ」の作付けが拡大し、いまでは経営の約 91% を占めるほどになりました。

J A の「仙台小ねぎ部会」や「ほうれんそう部会」の会員になっており、新技術・新品種の実証展示を率先して行って両部会の牽引役になってきました。新技術として平成 14 年には小ねぎの移植栽培に取り組みはじめ、技術的に確立されています。

受賞したことにより当組合が多くの生産者に知られることになりました。視察の受け入れも多くなり、このことにより生産者どうしの情報交換や交流へと発展してきました。地域の生産者、とくに若い農業者に良い刺激となっています。その証拠に地域の小ねぎ生産が拡大してきています。

さらに「次世代につなげる農業」を合い言葉に積極的に研修生を受け入れ、後継者の育成に取り組んでいるところです。

今後の取り組みに関する展望・課題等

ハウス栽培の拡大により施設野菜「仙台小ねぎ」が主となりました。さらなる効率化をめざして法人化を検討しているところです。

また、農業生態系を考えて、減農薬など「環境にやさしい生産」に取り組んでいます。



構成員の皆さん



収穫を迎えた小ねぎ

# 佐野サングリーンファーム

## 「地域農業の発展なくして 組織の発展はない」

### 営農状況・活動状況の変化

設立から30年近く経ち、発足当時の5戸の農家のうち4戸で世代交代がありました。第二世代にバトンタッチされて、全員が認定農業者となっています。一般的に組織の世代交代がうまくいかないことが多い中で、着実に実績を積み重ねてきました。

地域では佐野サングリーンファームの成功に地区内の他農家も刺激を受け、作業受託に積極的になってきました。



発足当時の構成員



ライスセンター

### 今後の取り組みに関する展望・課題等

米政策改革大綱が平成16年度から実施され、産地間競争が激しくなることが予想されています。これからも常温低湿型乾燥を武器とした「売れるコメづくり」をすすめ、「おいしい米」を求める消費者のニーズに産地直送で応えてゆきたいと考えています。

人員体制や機械の処理能力(300トン規模まで可能)からみると、まだまだ規模拡大の余地がありますので、現在の40ヘクタールから、機械・施設がもっと効率的に稼働できるような作業面積である60ヘクタールまで拡大することを目指しています。

さらに、現在は任意組織の形で行っていますが、将来は集落と一体となった完全協業化や法人化をめざします。



展望を語る大石代表



出し手農家と担い手農家の交流

### 編集

宮城県古川地方振興事務所 農業農村整備部

計画調整班(農村活性化担当)

〒989-6117 古川市旭四丁目1番1号

T E L: 0229-91-0701(内線 491 492)

F A X: 0229-23-5014

農村活性化担当では、ほ場整備事業実施地区等における農業農村活性化に向けた各種支援活動を実施しています。